

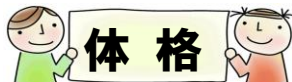
新たな感染症とともに



コロナ禍「1年の重み」

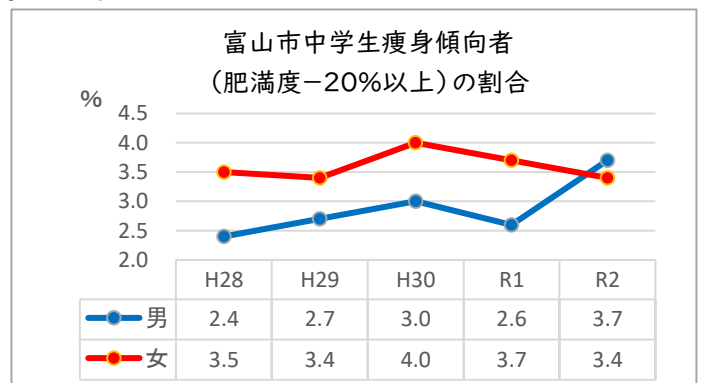
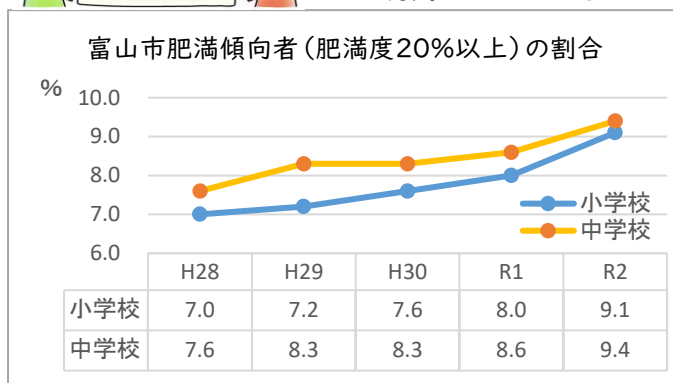
これまで検討会議では、子どもたちの心と体の健康を一番に考え様々な対策を進めてきましたが、それでもまだまだ子どもたちにとっては、制限の多い生活が続いています。

この1年間で起きている子どもたちの体調の変化をここにまとめ、この先の学校の在り方を皆様と共に考えていければと思います。

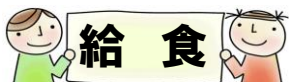


体格

注：例年は4月上旬に測定。今年度は測定時期にばらつきがあり、多くは6月の学校再開から7月上旬までの間に測定。

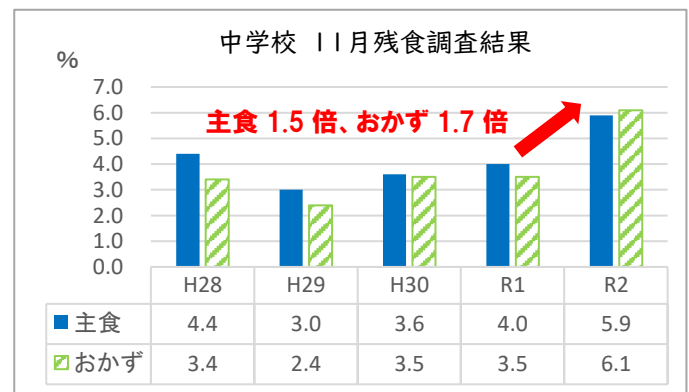


- ・全学年で肥満傾向者増(特に、小1男子 3.4%→5.8%、小1女子 3.9%→5.7%)。
- ・中学男子は**痩せ**が増加(中1 3.2%→4.9%、中2 2.2%→2.7%、中3 2.6%→3.7%)。
- ・自粛の影響で体を動かすことが減り、肥満が増えることは想定されたが、「**痩せ**」の増加には**注意が必要**。痩せは、命に関わる深刻な問題が潜んでいる可能性もある。全国的に摂食障害(拒食症)の増加が認められており、子どもの「うつ」の増加も懸念されている。



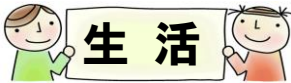
給食

注：11月の月～金の5日間で調査。例年は市内半数の学校に調査、今年度は全学校調査。

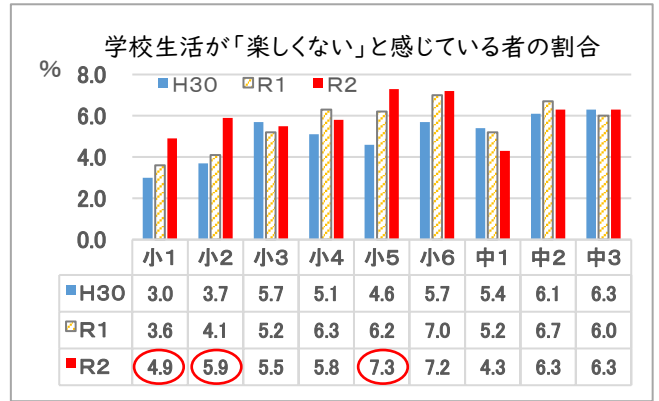
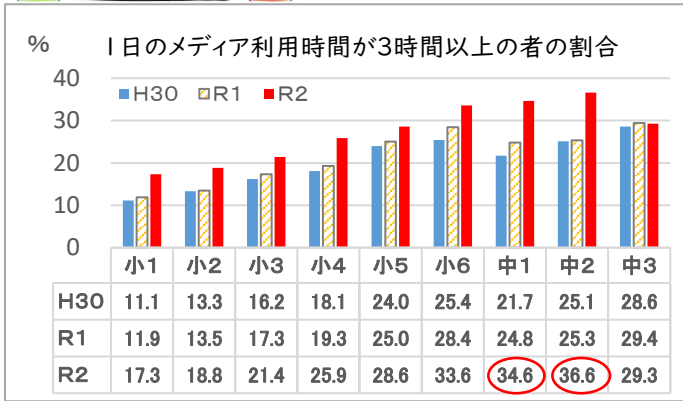


- ・2月に各学校に対して実施した意識調査では、残食が増えた理由として、「感染症対策(配膳方法の変更、黙食、活動量の減少等)が何らかの影響を及ぼしている」と答えたのは、小学校の6割、中学校の4割だった。
- ・感染症対策として、多くの学校で「同じ方向を向いて、会話をせずに食べる」という給食スタイルをとってきた。その中で、各学校それぞれに工夫している点を情報共有するなどして、給食時の環境改善を図り、コロナ禍における「楽しい給食の在り方」を考えていく必要がある。





～富山県教育委員会作成アンケート「とやまゲンキッズ作戦」の富山市集計結果から～



- ・1日のメディア（テレビ・ゲーム・インターネット等）利用時間が3時間以上の子どもは、中学3年生以外で増加し、特に中学1、2年生では約1割増えている。子どもたちの健康への悪影響が懸念される。
- ・学校生活が楽しくないと感じている子どもは、小学校低学年で増えている。まだ幼い子どもたちにとって、制限の多い学校生活は、大きな負担になっていると考えられる。
- ・学校行事の縮小や中止が影響している可能性が考えられ、次年度は学校行事をできる限り実施できるように検討会議として感染対策の在り方をさらに支援していく。

新型コロナウイルスワクチンについて

・16歳以上が対象

・筋肉内注射 ・3週間間隔で2回接種



2月17日から、ようやく日本でも医療従事者を対象としたワクチン接種が始まりました。

日本で承認されたファイザー/ビオンテック製ワクチンについては、4万3千人の治験結果が公表されています。イスラエルでは最も速いペースで同ワクチンの接種が行われ、治験結果と相違ない高い効果と安全性が確認されています。各国で引き続きデータの蓄積・分析が行われ、順次公表される予定です。

～ ファイザー/ビオンテック製ワクチンの治験結果 ～

- ・発症予防効果は95%とかなり高い（インフルエンザワクチンの予防効果は40～50%程度）
- ・発症したとしても重症化を防ぐ効果があると考えられる
- ・副反応は、接種部位の痛み、だるさ、頭痛、筋肉痛などほとんどが軽微なものである

※米国CDCは、同ワクチン接種後のアナフィラキシーは、約100万回接種して4.7人に発症し、全員が回復したと報告しています。これは他の薬剤と比べて特別多い数字ではありません。（インフルエンザワクチン接種では100万人に1人、抗生物質投与では100万人に400人にアナフィラキシーを生じるとされています）

●「遺伝子組み換えワクチン」で遺伝子操作？

あたかも人の遺伝子を操作するかのように印象づける報道やSNS情報もありますが、そのようなものではありません。最新のテクノロジーを使って開発されたワクチンであり、安全性と有効性を求めて製造されています。

●ワクチン接種で〇〇人が死亡？

接種後の反応については、「副反応か判断が難しい事例」についても全て報告されており、重篤な副反応を見逃さないように役立てられています。しかし、あたかも全てがワクチン接種の副反応のように報道されるケースも見受けられますので、その解釈には注意が必要です。

ワクチンの効果や感染した際のリスクなど、総合的に判断することが大切ですが、分からないことや疑問があれば、かかりつけ医師や学校医などに相談することをおすすめします。